

第1期第1回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時：平成24年6月14日（木）午後1時から

会 場：新潟市美術館 講堂

出席者：

（委員）会長	宮田 亮平	東京藝術大学学長
副会長	中山 輝也	新潟県博物館協議会副会長
	大島 煦美子	財団法人 新潟県女性財団理事長
	金山 喜昭	法政大学教授
	菅井 柳翠	書人
	野川 彰夫	新潟市立江南小学校校長
	福永 治	国立新美術館副館長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	武田 勝治	公募委員
	中村 文香	公募委員

（事務局）	木村 勇一	新潟市文化観光・スポーツ部長
新潟市美術館	塩田 純一	新潟市美術館長
	井関 一博	同 副館長
	松沢 寿重	同 主査（学芸員）
	濱田 真由美	同 学芸係長
	大谷 道佳	同 総務係長
	星野 立子	同 学芸員
	山岸 亜友美	同 学芸員
	杉本 藍	同 学芸員
新潟市新津美術館	横山 秀樹	新潟市新津美術館長
	小林 巧	同 副館長
	山崎 利雄	同 主幹
	大森 慎子	同 主査（学芸員）

次第：

1 開会挨拶

新潟市文化観光スポーツ部長	木村 勇一
新潟市美術館長	塩田 純一
新潟市新津美術館長	横山 秀樹

2 出席者紹介

(1) 委員紹介

(2) 事務局紹介

3 議事

(1) 会長・副会長 選出

(2) 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会について

(3) 新潟市美術館及び新潟市新津美術館の運営方針などについて

(4) 平成24年度新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業計画について

(5) 部会での検討事項及び座長の選出について

4 閉会挨拶

新潟市美術館館長 塩田 純一

1 開会挨拶

(木村部長あいさつ)

新潟市美術館では、2年前に仏像展の開催を断念したことをきっかけとして、当時の新潟市美術館の課題を明確にするとともに、問題解決に向け改革に取り組んできた。

また、平成17年の広域市町村合併により、本市は新潟市美術館と新津美術館という2つの特色ある美術館を有することとなったが、新津美術館には協議会が設置されて来なかった。そのため、今回から新潟市美術館と新津美術館の2館の運営やあるべき姿、その方向性などについてご意見を伺うために本協議会を設置した。

現在、塩田館長、横山館長の下、市民に親しまれ、愛される開かれた美術館を目指しており、職員一丸となって努力しているが、なおも委員の皆様からご意見やお知恵をいただき、よりよい美術館にしていきたい。

(塩田館長あいさつ)

私が昨年10月に新潟市美術館の館長に就任以来の感想として、この新潟市美術館の開館以降の27年間の歩みを改めて振り返ってみると、地方美術館としては非常に着実な活動を展開してきたという印象を受ける一方で、自己アピールがうまくいっていたのか、美術館として何を指すのか、どういう方向に向かっていくのか、そこを明らかにしていくところが少し欠けていたのかなと考えている。私の役割は何なのかと考えたときに、理念を明確に語っていくべきだろうと、その上で理念を肉づけしていく、いかに具現していくかという、それが課題かと考えている。課題の実現に向けて、いろいろな活動を展開していきたい。この協議会において忌憚のないご意見を伺いつつ、力添えいただきたい。

(横山館長あいさつ)

新津美術館は、旧新津市で建てられ、合併により新潟市になり、今年15周年を迎える美術館。私自身も美術館の館長になり3年目。受けたときには類似施設ということだった。昨年5月に相

当施設にさせていただいた。博物館法にのっとった美術館という形になり、協議会がなければならぬが、その前は類似施設ということで協議会を持っていなかったため、今年から一緒にの形で皆様にご審議いただき、ご意見をたまわりたい。

新潟市美術館と違い、新津市の市街地から車で15分から20分くらいかかる、丘陵地帯というか、田園の中にあるような美術館。ご覧になったことがない委員が多いと思うが、資料等でご審議いただきたい。

2 出席者紹介

事務局より、委員を紹介。事務局の出席者を紹介。

3 議事

(1) 会長・副会長 選出

事務局提案により、会長に宮田亮平委員、副会長に中山輝也委員を提案。全会一致の賛成により、両委員が会長・副会長席につき、議事に入った。

(2) 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会について

資料1 - 1頁に沿って、設置根拠・所管事務・開催予定及び内容・部会について事務局より説明。

(3) 新潟市美術館及び新潟市新津美術館の運営方針などについて

資料1 - 3頁「新潟市文化創造都市ビジョン」での位置づけ

資料1 - 5頁 新潟市美術館の今後の運営方針（案）

資料1 - 7頁 新潟市新津美術館の今後の運営方針（案）

これらの内容について、事務局より説明。

（中山副会長）

新潟市美術館の説明はよく分かる。新津もよく分かるのだが、新津は、秋葉区が前面に出ている印象。全市的なものでの表現がもっと出来たらいいと思う。

（横山館長）

当然、新潟市全体、全市的には広報しているが、やはり地域、地元には愛されない美術館は存在できないのではないかと。新潟市は8区に分かれている。まず、区の方々に来ていただき、全市の方々にも当然来ていただくということ。実は、区で新津美術館を知らない方々、来たことがないという方々も、多数おいでになる。とりあえず昨年度は、この（秋葉区の）地図を作った。

（宮田会長）

そういうことではないのではないか。

(中山副会長)

私は、新潟市美術館というピラミッドの頂点があって、次が全市型のもので、そして、この新潟市美術館の、こことどういう違いがあるかというのを出すことがまず一つあるし、それから、少しこの地域、旧新津市が出過ぎるような感じなので、そこが気がかりだと言った。

(横山館長)

展覧会の内容をどうするかということかと思うが、一応新津は、サブカルチャーというものを前からやっており、一つのメインで性格づけようということが出てくる。

(金山委員)

関係するが、基本的なことを確認したい。両方とも、まず、構想の理念が書かれていて、1から5というのは新潟市美術館の方、それぞれ発見する美術館、楽しく学べる美術館・・・とかなり具体的に書かれていて、非常に分かりやすい。これと比べて、新津美術館の説明を見ると、体裁が少し違う。読んでもなかなか素人の私にはよく分からない。要するに私は美術館畑ではなくて博物館一般ですので、そういう意味から言うと、1から3で言いたいことは何となく分かるが、きちんと整理されていない。この辺のところが、私自身は違和感があった。文書の作り方も、連携というか、ある意味一体的に今後運営していくということになったのだから、すり合わせをきちんとされることが必要ではないかと、それがこれを見ても見て取れないということである。

(横山館長)

いわゆるキャッチコピー的な言葉で語るのか、文章で語るのかというところで統一性はとれていないが、そこをどうするかという話は市美術館としておらず、私どもの方では文章形態にした。

(金山委員)

先ほどサブカルチャーの話があったが、新津でサブカルチャーを前面に出すのであれば、この「方針」のところできちんと出す必要があると思う。「各論と具体策」のところでサブカルチャーが急に出てくるため、多分、違和感が出てくるのではないと思う。

(宮田会長)

せっかく一緒に大きな傘の下、構想ができたので、今後の一つの大きな課題になると思うが、私もどちらかというと、市美術館の「今後の運営方針」の方が、見やすい気がした。それに準じて、協議の仕方をもう一度詰めていただき、次の協議会にお願いしたい。

(大島委員)

新潟市と新津の美術館の関係性が、組織的にどうなっているのか、この二つがどんな関連性を持っているかというご説明をいただき、そのうえで、それぞれを読ませていただくと、また違った風景も見えてくると思う。

(宮田会長)

今の時代、互いの人的なもの、物的なものの交流があるときに、新しい発信ができると感じた。

せっかく一緒になったと言いながら、会議を一緒にしただけで、中身についてはいまひとつという感じのご意見があるので、ぜひ、いろいろな検討をしていただきたい。

(福永委員)

もう一つ言えば、市のビジョンがよく分からない。何で1になって、何で2になっているのか、よく分からない中で、市美と新津美がどう役割分担するかというところが、私にはもう少し理解できていない。

ただ、現場としては、それぞれ伝統があり、それぞれの活動の実績を生かすべきだと思うし、そういう中で、ここに書いてある、どう資源を生かすかということだろう。相当難しいことだと思うが、両館がどういう役割を市の中でやっていくかということを、これから協議をされる状況なのかなと、今はまだとば口に立ったばかりなので、そういう意味ではちょっとスタイルが違うのかなという理解をした。

(降旗委員)

私も、同じ傘の下に入った両館が、どのような連携をしていくかということが、もう少し具体的に分かれればいいと思った。でも、今まで別にやってきて、それぞれの実績もあり、それが一緒になるということは本当に大変なことだと思うし、また、そこには新しい可能性もあると思う。数年にわたった計画で、1年目はこう、2年目はこうで、ゴールとしてはこういう形が望ましいというような、先を見た、5年先ぐらいのビジョンを見つめた計画などをされていくのがいいのではないかと思う。

(4) 平成24年度新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業計画について

事務局から

平成24年度の新潟市美術館の事業計画について資料1 - 9頁～10頁により説明。

平成24年度の新潟市新津美術館の事業計画について資料1 - 13頁～15頁により説明。

(宮田会長)

両美術館の事業計画について説明があったが、次回の協議会は、新津美術館でやってはどうか。いろいろな場所で行い、ご理解いただくのは、とてもいいと思う。

(横山館長)

ぜひ、お願いしたい。

(宮田会長)

あと、例えば「出前美術館」といった名称なども調整していくと、それから人事交流もううまくいくと思う。

(菅井委員)

新津美術館と新潟市美術館は、市の合併で一緒になったので、今のところはやむを得ないのかなと思う。必ずしも同じでなくてもいい。ただ、新潟市の中にあるわけで、先ほどのお話のように整合性をもって市の中の2つの美術館として、よりよく話し合いをすれば、うまくいくのではないかな。

(宮田会長)

これまでの意見は、何も2つの美術館、同じようなことをやれということではなくて、それぞれの個性は持っているが、それぞれの発信がうまく連携していったほしいということかと思う。

(中村委員)

両館の説明を伺い、こんなことをしたら楽しいのではと思ったアイデアを、お話ししたい。

今、若い人が自分たちのコミュニティを作って、自分たちで地域のために活動している団体が増えている。そういったところと美術館の施設をうまく使って連携していくことが、可能性もあり、いろいろな方が訪れる施設になるのではないかな。

私は実は十数年前までダンスを趣味でやっていたのだが、なかなか発表する場所がない。もし、場を提供してもらえれば、市内で皆さんも参加しやすい。「生きている美術館」という一つのヒントになると思った。

先日、東京に行き、「東北テマヒマ展」を見たが、私は新潟にいて、新潟はもっといいのがいっぱいあるよと思ったので、ぜひ、新潟市内で新潟の人たちに、そうだよ、俺たちこんなすごい宝を持っているというのに気づけるような企画展なども、ぜひやっていただきたい。

私はまだ新津美術館に行ったことがないが、昨日、たまたま出張で金沢に行き金沢 21 世紀美術館を見たのだが、建物も、新潟市美術館はスタンダード、クラシックな感じのちょっと近寄りがたい感じがハード面からも感じるし、少し入りやすくするための仕掛けをやっていくと、もっと身近なものになるのではないかなと思った。

(宮田会長)

いいアイデアが出てきた。特に市民のコミュニティの人たちに開放する空間を作るのは、おもしろいのではないかな。その点、新津美術館の空間の使い方は、いい。おもしろいことができる。

(横山館長)

現在もやっており、広報が足りない部分はあるが、ぜひ、多くの人に使っていただきたい。

(野川委員)

学校関係者として、授業の中で学校向けの教育普及事業ということで使わせていただいた。

学校は東区。昨年、出前美術館で先生が来て、授業をやっていただいた。学校の文化祭においていただき、一般の保護者の方からも作品を見ていただく活動をした。

オープン・ギャラリーについては、少し前に新潟市の図工教育の関係で学校関係の担任と学芸員さんと授業を計画し、いい授業をやってもらった。あと、教職員視察ウイークでも、何度かここを使わせてもらった。

昨年、国の新学習指導要領が変わり、特に図工・技術関係では、美術館との連携を密にしない、そこから学びを深めなさいというものが入ってきた。以前からも言われていたが、ここに来て実際の作品を見るのは、バスでないと来られない。全学年とは言わないが、例えば5年生なら5年生、3年生なら3年生が全部来て、ここで鑑賞するという形が望ましいが、なかなか予算の関係で、ほんの一部しかそういう経験ができない。これだけ美術館にかかわるような活動をやりなさいと言われているわりには、新潟市は分散しており、必要なのは分かるが、なかなかそれが実現できないことが悩み。出前美術館であれば、学校に来ていただくという形なので、これは我々40人なり80人の子どもを連れて行く必要はないので、別の形の鑑賞の学びは進められていくと考えている。

(宮田会長)

ここに子どもたちを連れてくるのは、やはり大変か。

(野川委員)

近くの学校であれば、歩いて来られる。何校かはここに歩いて来られる学校がある。そこは意志があれば来られるが、例えば江南小学校であると、7キロくらいあり、貸し切りのバスをチャーターして来るとなると、美術館鑑賞用のバス代は予算にない。

何とかここから出る予算がバスに充てられるシステムがあると、手を挙げて来る。以前はそれを利用して授業をやったことがある。

(宮田会長)

地域が違っていると難しいかもしれないが、例えば私どもの組織では、資金提供いただくところに走り、それに対して機関に対しての宣伝とか、いろいろな効果は見込まれる、ということで交渉し、そういう一つの流れを作ったことがある。それが逆に成功して、民間企業との連携がうまく取れたり、その後の資金提供をしてくれたり、1個のきっかけが、風を作るということもある。ご苦労は分かるが、そんなことも少し考えに入れたらいいと思う。

(大島委員)

展覧会や催し物の入場者とかのアンケート調査などは、全部やっているのか。年代別にデータの把握などは、しているか。あとは入場券を受け取る担当者が、見た感じで記録する方法もあると思うが。

(井関副館長)

アンケート自体は任意でやっているが、全員は回答くださっていないが、回答があった中での傾向は掌握している。

(大島委員)

と言うのは、傾向を一つの形として残しておく、今後の企画をするにあたっての大事な資料になっていくと思ったもので。高齢者人口が多いが、そういう方々が鑑賞も本当に大事でしょうが、これから活躍していく若者世代を、心豊かに生活していただくため、この美術館をどう活用してもらおうかという視点も大事だと思う。過去の入場者の年齢層を把握しながら、次への企画に生

かしていく必要があると思う。

もう一つ、新津美術館のこのマップを拝見したら、飲食店などいろいろあるが、これは掲載するにあたってお金をいただいたということか。

(横山館長)

いただいている。

やはりうちの美術館の周りに何もないので、来られた方が、どこかにおいしいものを探して回るので、とりあえず周りの店を紹介するという事で掲載した。

(大島委員)

必要に迫られてのアイデアだが、これは一つのおもしろい提言をしていると思う。

先ほど会長からも企業と提携した話があったが、チラシに企業名を入れることで、企業から寄付をもらうとか、そういうことで少し財源確保していくとか、両館とも、これからの流れとしてやってもいいのではないか。

それから学校の方も、予算がない、ではなくて、美術教育を子どもたちにいかにふくらませていくかという思いがあれば、それこそ財源確保で頑張ってくださいなども今後は大事なのではないかな。先生もいろいろ大変でしょうが、せっかくすばらしい施設があるので、それをどう活用していくかというときに、財源の確保にも頑張ってくださいたい。

(金山委員)

ちょっと前に戻るが、「今後の運営方針」について館長にお聞きしたい。運営方針と各論の具体策は、館の職員たちと一緒に話し合いながら作られたものなのか。

(塩田館長)

私が就任する前から、学芸職員を中心として積み上げてきたものに、さらに私が入ってから手を入れて、整理をした。学芸職員それから副館長以下、総務の職員を含めて議論しつつ、まとめてきた。

(横山館長)

新津美も同じような形だが、新津美の場合、ここに挙がっているのは、実際にやっているものがほとんどで、ある意味、実行している。その実行にあたっては、当然皆で協議しており、それを載せている。やっていって、これからまた新たなものも出てくるだろうが、今やっているものが具体策だと思い、それを載せている。

(金山委員)

基本理念を受けて具体策があるので、基本理念を再整理するということであれば、基本理念に例えば市美術館の場合は5つあり、各論と具体策の中で1から5がどこに当てはまるのかという、その整合性というものをつけた方が、我々にも市民の方にも具体的に関連づけができて、評価がしやすいと思う。今すぐには無理かもしれないので、ちょっとお考えいただきたい。

もう一つは、やはり両館で連携を今後していくうえでは、それぞれの館で作られたものをお互いにすり合わせていくことも必要だと思う。館長をはじめとする職員間で、相互に突き合わせと

いうか、強みを生かしあいながら、弱みは補いあっていき、そして、両館合わせたからこそ新しいものが生まれるという、新潟の美術館というものを目指していただきたい。両館の具体的な職員間の作業について、今後お願いしたい。

(中山副会長)

私は、新津市の方を、市長2代にわたってお手伝いしていた。その時、いずれ合併した場合、いろいろな問題が出るよとは申し上げていた。今考えてみると、新潟市美術館は太陽だ、新津は月だというような形で、地球である市民を照らしているのだという感覚に立つと、何かいいアイデアが出てくるのではないかと思う。

(武田委員)

私は新潟市美術館の市民ギャラリーに展示したり、新津美術館の市民ギャラリーによく展覧会の鑑賞に行く。新津美術館は、特に演奏会が私は大変気に入って、美術館でもこんなことをやっているんだと、これから大変関心を持って美術館通いを始めた。

(降旗委員)

今、美術館の教育普及活動というのは非常に重要という認識、学校教育の教科書そのものも変わり、学校と美術館の連携は強く言われるようになってきた。美術館も、80年代後半に開館した美術館あたりから、教育普及活動と非常に強く言われるようになり、鑑賞教育やワークショップ教育など、盛んに行われてきた。私どもの目黒区美術館でも、そういった活動が盛んに行われてきた。今、教育普及活動は避けて通れないし、新潟市美術館の運営方針を見ても、かなり重要視して挙げていると感じた。

加えて、私も長くやってきて、美術館の普及、それから美術の普及が、人間性の回復というか、本来、美術そのものがもっているものだというのが非常に強く言えるのではないかと感じるようになった。そこで、何のために教育普及活動をやるかという大きな目的というか、そこがもう少し明確に出てくるといいのではないか。最近、私がいろいろな美術館の活動を見ていて、鑑賞教育そのものが目的に、ワークショップそのものが目的になってしまっているところがあると思う。ワークショップや鑑賞教育というのは、本来は何かをやるための手段であるという認識を新たにしていかなければいけない。もっと子どもたちの心に働きかけていく、高齢者の問題が出たが、地域性とか風土とか、私たちがいる東京とはいろいろな意味で違うと思うが、そういう中で、市民の求めていることも必要であろうし、こちらからある程度提示していく活動というものも必要だと思う。

それから、最近、うちの美術館でもいろいろ変わってきていて、未就学児の参加が増え、ボランティアの活動で児童館もやっているが、その申し込みが非常に増えている。若いお母さん方がインターネットを通しての知的欲求というか、美術館に対する興味が非常に強くなっていると感じる。そういう年齢にも広く何かできる、例えば新津の施設的な特徴をうまく活動に生かしていくことも可能なのではないか。

例えば東京都が文化財ウィークというのをやっていて、ある時期にまとめていろいろな寺社仏

閣の文化財を見せるというもので、東京の港区もたしかやっていて、港区のいろいろな美術館が連携し、その時期はすごく人も増えて動く。そのように年間を通して一つ时期的にポイントをつけて、例えば両館が連携して、違う展覧会同士でもいいと思うが、そこで何か企業に働きかけてバスを出してもらおうとか、そういう形での鑑賞教育を発展させる方法もあるのでは。

(宮田会長)

美術・芸術はインターナショナル言語。保育園でネイティブ英語の教育をしましょうと、すると、お母さんたちがとびつくが、しゃべっているだけでは、子どもたちはすぐ飽きてしまう。そこで、ネイティブランゲージをしながら、その絵を描く。すると、子どもたちは絵に夢中になって、花なら花を一生懸命描き、flower とか cat とか言語をすぐ覚えてしまう。インターナショナルのものと、今お母さんたちが欲している、教育したいと思うものがうまく合っているのが印象的で、ちょっとしたヒントがあったと思う。そういうことを幼稚園や保育園ではなく、美術館の中でやることもできるのかなと、一つの実践例を紹介した。

(福永委員)

普及活動も含めて、両館の連携を例えばどういう時期にやるか、どういうものをやるか、両館をつなぐのは車で1時間程度という中で時期や内容をこれから検討されるといいと思う。

また、どういう方向で展覧会をやっていくか、柱がいくつかあったが、それを含め、中期的なもの、長期的なものも含めて、少し方向性が指し示されると、市民の方もわかりやすい。

それから、予算について。新潟市としては文化予算、展覧会予算などは減少傾向にあるのか、あるいは維持されているのか。

(井関副館長)

予算については、減少傾向にある。ただ、部の総額の範囲の中で部内で調整して組むというのが、今の新潟市の予算システムのやり方で、その総額の中で工夫して組み立てている。

(福永委員)

両館の予算のかかかわりは、どうか。

(井関副館長)

部単位であり、両方とも文化・観光スポーツ部に属しており、その中でいくらという整理なので、総額でその中に収まっていれば支障はない形。

(横山館長)

独立採算なので、市美術館と新津美術館とは予算形態は別々に持っている。

(宮田会長)

中身の濃い、いろいろな提言が出た。

「図画工作」という言葉があるが、あれは「図画工学」と私は言っている。科学のヒント、きっかけは、突き詰めるとそこに確実に芸術が内在しているように過去の事例の中から感じる。日本の新しい文化を創るために、そういう機会が必要である。

文化とは文明開化の略語である。文明開化を新しく作った明治の時期が、あらためて日本には

必要な時期にきたと、新しい開化の時期だと、そんな気持ちで動いている。

「発見する」「楽しく学べる」「生きている」「つながる」「信頼の美術館」とてもいいキャッチを前面に打ち出して、新しく生まれ変わったのだということで動いていてもらいたい。ただ「楽しく学べる」はくどい。「学べる」でいい。そして最後にすべてを統括して「信頼できる美術館」へと持って行ってほしい。

（５）部会での検討事項及び座長の選出について

４名で構成する部会のテーマについて、事務局からの提案に全会一致で「新潟市美術館と新潟市新津美術館の連携」に決定。

座長について、事務局提案に全会一致で金山委員に決定した。

（塩田館長）

今日のご指摘のとおり、新潟市美術館と新潟市新津美術館との差違が明確になっていないところが確かにあると思う。今後、部会の方でご議論いただければありがたい。

貴重なご意見の数々を踏まえて、今後の活動に生かしていきたい。